

災害時の学校の役割

学校は主に子どもたちが利用する施設ですが、災害時には避難所として利用されています。このため子どもたちにとってだけでなく、避難者にとっても安全な施設でなくてはなりません。

市では現在、さまざまな利用の形態を想定した、安全安心な施設の整備を進めています。

災害時の避難所として

近年は地球温暖化などの影響で、想定していた以上の自然災害がもたらされることがあり、公共施設の防災機能の強化が求められています。

学校施設の多くも避難所に指定されていて、昨年の台風19号では実際に避難所が開設された学校もありました。特に体育館は、学校施設の中でも最初に活用される施設です。市では東日本大震災での天井崩落事故をきっかけとして、体育館の天井の改修工事を順次進めてきました。今年度までに市内20校、全ての学校の体育館で耐震性が確保される予定です。

校舎については、平成27年度に飯岡中学校を改築したことで、全ての学校で耐震性が確保されています。

沿岸地域の学校は、津波発生時の避難先になっていることから、屋外階段が設置され屋外からそのまま屋上に

災害が起きる前に
早めに避難しよう!



避難できるようになっています。

これからの学校整備の考え方

今後は建物の耐震性の確保に加えて、バリアフリーの観点からトイレの洋式化を進めていく予定です。

いざというときには命を守る施設になることから、子どもたちの学校生活だけでなく、避難者がより安全に施設を利用できるように取り組んでいきます。

学校施設に関するくわしい内容は、庶務課施設班(☎55-5722)に問い合わせてください。

あさひ輝いた人々 第17回

明治時代 32歳の若さで国会議員

加瀬 禧逸 (1873～1928年)



加瀬禧逸は弁護士、衆議院議員、大学評議員とさまざまな分野でその才能を発揮し、多忙な生活を送りました。

明治6(1873)年に、旭町太田で加瀬敬之(正藏)の子として生まれました。

明治30(1897)年、英吉利法律学校を卒業して弁護士を開業しました。その後、弁護士としての誠実な仕事ぶりから、周囲の人々の薦めで東京弁護士会の副会長に就任しました。

明治38(1905)年には、わずか32歳の若さで衆議院議員に当選し、当時の最年少議員としてかなりの注目を浴び、14年間議員を続けました。

立候補当時の様子について、大正13年5月4日の東

京日日新聞(現在の毎日新聞)には「加瀬禧逸は病床にあり、立候補は到底不可能と言っていたのにもかかわらず、選挙区民が熱烈なる懇願をしたので、ついに意を決して立候補することになった。また、銚子で政見発表演説会を行ったが、人が多すぎて、1日では終わらず、3日連続で開会した」と書かれています。この記事を読むと、どれだけ人望が厚かったのか分かります。

国会議員在任中には、旭市を流れる新川の改修に力を尽くし、旭以外でも銚子の港を造ることに力を注ぎました。国会議員となっても威張ることもなく、いつも謙虚な性格で誠実な人であったといわれています。後に中央大学評議員も務めました。

外交官として第二次世界大戦前後の激動期を日本外交の最前線で活躍し、初代国連大使を務めた加瀬俊一の親でもあります。

昭和3(1928)年に亡くなりました。



加瀬禧逸の碑